

15例中12例(80.0%)悪性、(4)欠損像の辺縁が陥凹しているもの15例中12例(80.0%)悪性、(5)欠損中に菲薄像がある23例中7例(30.4%)のみ悪性であった。以上の悪性所見項目数が2つ以上あるものは悪性で20例中15例(75.0%)、良性では18例中3例(16.7%)で、<sup>131</sup>Iシンチのみでの良悪鑑別の適中率は38例中30例、78.9%であった。

<sup>201</sup>Tlシンチで第17回日本核医学会総会で発表したように限局性集積比2以上を(++)とすると、悪性では20例中11例、良性は18例中4例あり、(++)の15例中11例(73.7%)悪性であった。限局性集積比0.8以下の(-)の7例は全例良性囊腫で欠損として描出され、悪性はなかった。手術所見で頸部リンパ節転移のあった7例中5例(71.4%)に陽性像が得られた。

<sup>131</sup>Iシンチの悪性項目に<sup>201</sup>Tlシンチで(++)と転移巣の描出の2項目を加え検討した。悪性では2項目以上あるのは20例中18例(90.0%)、良性では18例中3例であったが、そのうち2例は<sup>201</sup>Tlシンチで囊腫の所見であり除外すると、18例中1例(5.6%)で、良悪鑑別の的中率は38例中35例、92.1%と上昇した。鑑別できなかった3例は、1例は径1cmのsclerosing carcinoma、1例は表面が2コの良性囊腫が合併していた乳頭腺癌、1例は一部Hürthle cell adenomaを伴った腺腫であった。

## 6. 全身骨シンチグラフィーで著明な変化を認めた腎性骨異栄養症の3例

木田 利之

(福島医大・放)

工藤 信一

(同・内)

藤田 悠治

(太田総合ささら病院・RI)

〔目的〕 全身骨シンチグラフィーで著変を認めた腎性骨異栄養症3例を経験し、うち2例に転移

性石灰化の疑いがもたれ、それについても検討する。

〔対象および方法〕 対象は、臨床検査成績ではいずれもPTHが異常高値で、二次性副甲状腺機能亢進症を示した3症例である。方法は、全身骨シンチは<sup>99m</sup>Tc-MDP(10mCi)静注後3時間に撮像、さらにカラーテレビジョンディスプレイによる画像解析を行ない、転移性石灰化が疑われる場合には、<sup>99m</sup>Tc-MAA(3mCi)による肺シンチ、および<sup>201</sup>Tl-Clによる心筋シンチにて検討した。

〔症例示説〕 症例1 36歳、男。透析36カ月。全身骨に著明なRI集積を認め、カラー解析による色調面積比も、同一年齢のControlと比較して大差がみられたが、心、肺には異常はなかった。

症例2 45歳、女。透析歴46カ月。症例1ほど骨異常を認めなかつたが、心に異常集積を認め、<sup>201</sup>Tl心筋シンチは左心の拡大像以外に異常なく、<sup>99m</sup>Tc-MDPにより異常集積を認め、心筋への転移性石灰化と判定した。

症例3 41歳、男。透析歴64カ月。3例中骨変化は最も少なかつたが、心および左肺にRI異常集積を認めると共に、カラーディスプレイにより、腹部大動脈、総腸骨動脈にも集積を認め、Gramesらの報告のごとく、血管への転移性石灰化像を得た。肺血流スキャンは左肺の血流の減少を認め、胸部X-Pと考え合わせると、Congerらの報告のごとく、肺線維症によるものと考えている。一方、<sup>99m</sup>Tc-MDPによる心筋シンチでは、軽度の集積がみられ、転移性石灰化の所見を得た。

〔まとめ〕 全身骨シンチグラフィーで著変を認めた腎性骨異栄養症3例について報告し、1例には心筋に、1例には心、肺および腹部大動脈、総腸骨動脈の転移性石灰化を暗示する情報が得られたことを報告した。